

ISSN 2078-7359

多元文化交流

東海大學日本語文學系

二〇一二年

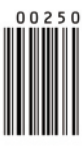
第四號



東海大學日本語文學系



ISSN 2078735-9



9 772078 735009

<論文>

国文学者の戦後と冷戦

—西郷信綱の「国民文学」と「世界文学」言説—

笹沼俊暁

要旨

第二次世界大戦後の日本において、日本文学・国文学の新しい研究について、どのように議論されたかを検討する。国文学・日本文学のナショナルな枠組は明治期に創出された。それは、第二次世界大戦後の冷戦体制下の新しい国際環境を背景に、どのように受け継がれ、組み替えられたのだろうか。特に、戦後におけるマルクス主義国文学者を代表する一人と目される西郷信綱の、一九四〇年代から五〇年代にかけての言論を中心に、その問題を考察する

日本文学の世界性・国際性をめぐる当時の議論は、アメリカによる占領を前提とした国際協調主義を目指すものと、ソビエトや中国ら社会主義諸国を意識したものの、異なる二つの方向からのものがあつた。だが、そうした東西冷戦下の「世界文学」をめぐる議論でしばしば忘れられがちとなつたのは、かつて戦前・戦中の「大日本帝国」が、大東亜共栄圏という日本を中心とした独自の世界秩序を構築しようとした過去だつた。

キーワード:「日本文学」「国文学」「戦後思想」「冷戦」

1 はじめに

本稿では、敗戦後まもない一九四〇年代から五〇年代にかけての日本において、どのような日本文学・国文学の新しい研究が目指されたかを検討する。戦時体制のなかで国策言説と

して隆盛した国文学というジャンルは、戦後にどのように継続し、また組み替えられたのだろうか。明治期に創出された国文学・日本文学のナショナルな枠組が、大東亜共栄圏という一種の世界理念の崩壊を経て、戦後の冷戦体制下の新しい国際環境を背景に、どのように受け継がれ、組み替えられたのだろうか。特に、戦後におけるマルクス主義国文学者を代表する一人と目される西郷信綱の、一九四〇年代から五〇年代にかけての言論を中心に、その問題を考察する。

2 国文学者の戦後

第二次世界大戦中、ほとんどの国文学者は戦争遂行の国策を積極的に支持し、鼓舞する役割を担っていた。明治期に上からの国民国家形成の一環として官学アカデミズムを中心に作られた国文学・日本文学という学問制度は、満州事変から日中戦争、太平洋戦争にかけての時代において、国策に沿ったナショナリズムを鼓舞する役割のクライマックスを迎えたといってもよかった¹。しかし戦中に「新国学」「皇国の学」としての国文学の役割を説いた国文学界は、戦後においてもその大部分の論理や、体質、担い手等を失うことなく継続した側面が強いのである。

「玉音放送」からわずか半年あまり、雑誌『国語と国文学』一九四六年三月号は、「国文学の新方向」という特集を組んだ。その巻頭に東京帝国大学国文学科教授の藤村作は、いわば当時の国文学アカデミズム全体を代表する形で、「国文学徒今後の任務」という文を寄せていた。藤村は「敗戦といふ悲惨で、厳粛な事実は儼乎として我々の上に或る」と書き出したうえで、この敗戦が「平和日本、文化日本の新建設」「国家の民主主義化」という課題をつきつけていると述べていた。その中で一役を担うのが「我々国文学徒」の責任だというのである。

この敗戦の原因はさまざまに考へられるが、わが独りよがりの世界孤立の途が正しくその一つであつたであらう。建国の精神に頼り過ぎ、世界の犬勢を無視して、独自の途とし

1 笹沼俊暁『国文学の思想—その繁栄と終焉』(学術出版会、二〇〇六年)。

たところに旨進したのがその一つであつたらう。今や敗戦は否応なしに、わが国をして民主主義の世界大勢の中に入らしめた。(中略)

わが古来の歴史を顧みれば、民主主義思想は外国新輸入の思想とはいへない。わが国天皇統治の根本にこれを見出し、又明治以来の政治にこれを見得ることは夙に識者の説くところである。今敗戦に臨んで連合国に民主主義化を求められたといつても、決して驚き恐るべきではない。寧ろ喜び迎ふべきであつて、わが歴史中のこの思想を世界大勢中に育成させ、これを現代化することに依つて、武士的、軍国主義的指導者のために歪められて来たわが国家を正しく引直す意味に於て、民主主義化が行はれ、そこに独自の民主主義的平和国家、文化国家が創造され、建設さるべきではあるまいか²。

ここで展開される論理は、戦中から戦後へ、国文学の役割を反転させるものであり、また継続させる論理でもあるといえよう。藤村作は、一九四二年六月の『国文学 解釈と鑑賞』の巻頭論文で、「大東亜戦争の理想」を述べ、東亜新秩序の建設を謳っていた³。にもかかわらず、ここではそうした自ら率先して掲げていたはずの戦争肯定の論理を、一部の「軍国主義的指導者」の強制による日本精神の歪曲にすぎなかったとして切り捨てている。平和と民主主義は外国から強制された転向思想ではなく、もともと日本固有の天皇統治の思想だったというのである。

このように戦争肯定を平和主義へと反転させ、「特殊な国体」「特殊な国民精神」の継続性を強調する論理は、当時の国文学者の少なからずに通じたものだった。『国語と国文学』『国文学の新方向』で、能楽研究者の能勢朝次は、「研究者の道義」を説き、敗戦後の時勢に便乗する「米国の宣伝屋か蘇連の宣伝屋」を揶揄しつつも、「日本国民は建国の古から、平和と美と道義の愛好者であり、清浄潔白を尊ぶ国民である」と述べていた⁴。戦時中の国文学の戦意高揚の国策言説を切り捨て、国文学の民族的精神を戦後的な平和主義にすり替えてその歴史的な継続性を強調する論理である。また、東大系の日本文学学派と並び当時国文学界で勢力をもっていた日本文芸学の代表的人物である岡崎義恵は、「日支事変を経て今次の戦争に

2 藤村作「国文学の新方向」(『国語と国文学』一九四六年三月)。

3 藤村作「大東亜戦争の理想」(『国文学 解釈と鑑賞』一九四二年六月)。

4 能勢朝次「国文学界は如何にあるべきか」(注3前掲誌)。

入るに及んで、一般に学問や芸術の自由は失われ、社会歴史的学風は極端な圧迫を受けて、ほとんど屏息の状態に陥ると共に、日本文芸学もまた、その国民的一面のみは認められながらも、芸術性の尊重という点は無視されて、次第に学会から忘れられようと言ったのである⁵と述べて、芸術至上主義を盾にあたかも日本文芸学が軍国主義の犠牲者であったかのように主張していた。

国文学のこうした戦中と戦後の問題については、一九九〇年代後半以降、安田敏朗や坪井秀人、杉山康彦、紅野謙介による研究がなされている。安田敏朗は、『国文学通論—方法と対象—』『日本文学の思潮』などの戦前・戦中の久松潜一の著作が、戦後の一九五〇年代の改訂版において、どの部分がどのように書き換えられたかを検証している。安田によれば、久松の国策的な国文学論で重要な位置を占めていた国文学風土論の部分は、ほぼそのまま遺された。また戦前・戦中に国文学の精神として重視されていた「肇国の精神」についての記述もまた、やや弱められたもののやはり多くは残された。そして天皇については、日本の歴史と政治の中心として評価する記述が削除された。かわりに「文化」の中心として位置づけ直すことで、天皇についての記述が残留したという⁶。また、坪井秀人は、敗戦に際しての『国語と国文学』を検証し、そこでの藤村や久松らの論理が、情報局や日本文学報国会の皇国思想からGHQのプレス・コードへと適応の対象を変えることによって、時局の変化から国体＝国文学を守ろうとするものだったと述べている。そのために、天皇や風土のナショナルな同一性が、戦中・戦後の連続性の担保とされたという⁷。

しかし、藤村や久松、岡崎ら当時のアカデミズムで権威をもっていた「大家」の、敗戦後におけるこうした曖昧な継続性を指向する態度は、おもに若い世代の研究者や批評家によって、反発を呼び起こすことになった。『国語と国文学』『国文学の新方向』の三ヶ月後、岩波書店の『文学』は、臼井吉見、小田切秀雄、窪田章一郎、五味智英、永積安明、福田恒存の六人の国文学者および批評家を招いて「日本文学研究の諸問題」と題する座談会の記録を掲載した。四〇年代初頭の臼井を除けば当時いずれも三〇代の若手だった。彼らは、国文学という学問の本来的な体質にまで遡って戦時中の国文学の在り方を批判し、戦後に向けての新しい学問の在り

5 岡崎義恵(同前)

6 安田敏朗『国文学の時空—久松潜一と日本文化論』三元社、二〇〇二年。

7 坪井秀人「〈国文学〉者の自己点検 —イントロダクション」(『日本文学』二〇〇一年一月)。

方を模索しようとしていた。敗戦の約一年後におこなわれたこの座談会は、以後の戦後の国文学の動向を示唆する、様々な要素が盛り込まれていた点で興味深いものである。

先陣を切って発言した臼井吉見は、まず事実の確認をすべく「戦時中の国文学界といふやうなもの、そのあり方は非常にはっきりしたもので、国文学者がむしろ自分から動員されて、一切の古典を掲げて、戦争に協力したものだらうと思ひます」と述べていた。そしてその原因の一つとして、国文学者は「文学を文学としてとりあげてゐない」としていた。「外国文学の学者に比べるとはつきりするが、近代精神の把握がない、近代人間にまだなつてゐない」という。それに対して小田切秀雄は、「なんだか国文学者にとつては、文学は自分の問題でなく、今まで生活の途として行はれ、戦争中生活の途を保つためには戦争に協力しなければならなかつた。その戦争が終つて今度は戦争責任の追及に生活の途をとり、歩調を合わせて行くといふのが一般の国文学者ぢゃないかといふ感じが強くなります」と述べていた。つまり座談会のメンバーの間では、従来の国文学者には、近代的な独立した自我と主体性が根本的に欠けているという考え方があった。近代的な主体性が確立されていないからこそ、時局の変化に合わせてまた生活の術を求めて体制に順応し、あまつさえそれに対する自覚や反省すらも無いと、彼らは考えたのである。

そして小田切はまた、国文学者の世界にはびこる「封建的な徒弟制」についても批判した。「封建的な主従関係が目に見えない形で、蜘蛛の巣のやうに張りめぐらされて、自由の発言がやりにくい。国文学者の戦争責任の追及といふことは殆ど言はれない」「それほどなにか近代的でなく、若い人がをつてもなかなか出てこれないやうな状態が今まであつたと思ひます」という。近代的な主体性が確立していないからこそ、前近代的な徒弟制を温存させている。その点で、国文学者の多くの表面上の態度こそ変わったものの、戦前・戦中と戦後でその本質は何も変わっていないと、彼らは批判したのである。国文学者の戦争責任をめぐるこうした議論の背景にあったのは、いうまでもなく、当時小田切自身を含めた『近代文学』同人を中心に、「主体性」や「近代的自我」をめぐる交わされた議論だった。この「近代」「主体」の問題は、戦後の日本古典・近代文学研究の重要な一部分をのちのちまで規定していくことになる。

また座談会では、戦前・戦中の国文学のあり方に対する批判と反省という、いわば断絶性を指向する議論とともに、日本文学の古典をいかにして「遺産」として引き継いでいくべきかについても話し合われていた。この問題についてはまず永積安明が、日本の古典文学の中には、

「本当に文学として今日のわれわれの血となり肉となり得るものが果たしてあるかどうか」と問いかけていた。それに対し臼井吉見も、「結局古典なり過去の文学はわれわれの継承すべきものじゃないかと思ひます。それでどれを採り、どれを捨てるといふことだつて、やはり大きな継承の問題だと思ひます。借金も貯金も皆われわれが引き受けなければならぬ」と述べた。

ここでいう「われわれ」とは、座談会の参加者以外に具体的にいかなる主体を指しているものなのか、座談会の場では明らかにされていない。だが彼らは、一九五〇年前後になると、「国民文学」と呼ばれる議論に参加し、「国民」「民族」について積極的に論じることとなる。「文学遺産」を引き継ぐべき主体としての日本民族について議論していくことになるのである。そしてまた、ここでの「遺産」という言い方そのものに、古典から現代にいたるまでの日本文学・国文学の歴史的な自己同一性の連続性が前提されている。この意味では、彼らは「大家」たちの戦後の無節操な延命を批判しつつも、国文学の枠組の継承を意図していたともいえる。

ただし、国文学の継続性とはいっても、当然それは、多くの価値転倒の実現を前提とするものだった。なぜなら戦時中には、国家の意思を人々に強制するための道具として、古典が祭り上げられた経緯があったからである。それについて永積安明は、「古き典といふことも、非常に封建的な、いはば上からきめられた問題とされてあるわけで、受け取る人間が自立してゐないから総て典にされてしまふ」と指摘した。国家による上からの権威主義的な強制ではなく、さきにも見た近代的な主体・自我の確立を前提としたうえで、国文学の継承と連続性がなされるべきと考えていたのである。しかもその主体は、歌壇のような狭い世界で自足するものではなく、より広い社会性の中で展開されてゆくべきものだった。臼井吉見は、「大体連歌なり、連句なりは、一口に言つてグループの文学、仲間の文学で、教養も、話題も、趣味も同じで、狭い仲間の内だけで通用するといふ狭いもので、最大のを盛り得たなどとは到底言へない」と述べていた。国民的・民族的な社会性を持つ主体こそが、国文学の継承者たりうることになる彼らは考えたのである。

別稿でも述べたことだが、戦後に展開された近代的自我をめぐる文学者の言説は、総力戦体制につながる論理を本質的に内包していた⁸。国民・民族を自明の前提としていた点で、戦後の国文学はその出発の時点から、明治以降の国文学の枠組の連続性のリボンの表裏を逆に

8 笹沼俊暁「日本近代文学研究と戦争一片岡良一と「近代的自己史観の来歴一」『昭和文学研究』二〇〇六年九月。

ねじろうとしたものだったと言えるだろう。それまでリボンの表側だった天皇賛美と戦争肯定の側面を裏面へとねじり、裏側だった民主主義や個人の側が表側へ向けられた。しかしリボンが切断されることはなかったのである。さらに、村井紀がその論考「国文学者の十五年戦争」(『批評空間』一九九八年一月・七月)で指摘しているように、国文学者の戦争責任を追求する小田切秀雄らも、彼ら自身、戦争責任から自由だったわけではなかった。

しかし、一方で彼らの発言は、時代の激流のなかでの知識人・研究者としての生き方そのものを問い直し、新しい学問を打ち立てるため自らの存在そのものを築き直そうとする問題意識の現われだったことも確かだった。現代でも、グローバリゼーションと経済効率主義、競争主義の嵐の中で、学問にたずさわる人々は、生活と将来に対する危機感からややもすれば自らの知的主体性や生き方を守ることが困難となる。そうした意味では、現代の知識人・研究者もまた、戦時下の反省に立つこうした議論を軽々しく笑い飛ばすことは決してできないだろう。

3 国文学の「世界」

戦後の若手の国文学者や批評家の言説は、戦前・戦中の体制からの連続性の中から生まれつつも、少なくとも主観的には、同時にそれを改変させようとする意図を強烈に含むものとして現われたものだった。彼らは、近代的な個人の主体や科学的世界観、近代市民社会などの論理を国文学の世界に持ち込むことで、戦前・戦中の論理を反転させようとしたのである。

そしてここで、同じく戦前・戦中から続く国文学の民族的パラダイムの連続性を保証しつつ改変するための手段として、個人主義や主体性の論理のほかに、当時、大家から若手まで含め多くの国文学の研究者や批評家が、「世界性」「普遍性」「国際性」の論理を前面に押し出していた点に注目したい。和辻哲郎『鎖国 日本の悲劇』(岩波書店、一九五〇年)に典型的に見られるように、戦後の日本では、敗戦の原因を、世界の実情を顧みない独善性・鎖国性にあつたと考える論調が高まった。それは文学研究の業界でも例外ではなく、戦時体制への協力と賛美を積極的におこなった人々も、また少なくとも主観的にはそれを批判しようとした人々も含め、戦後の文学研究の世界で広く、国文学の閉鎖性・鎖国性の問題が反省的に言及された。より国際的で世界的な視野のもとでの研究の構築の必要性が意識されたのである。

すでに見たように、敗戦後まもない一九四六年三月の『国語と国文学』で、国文学界の重鎮・藤村作は、敗戦の原因の一つを「わが独りよがりの世界孤立の途」に求め、「今や敗戦は否応なしに、わが国をして民主主義の世界大勢の中に入らしめた」と述べていた。そして同号では同じく東大国文学科教授の久松潜一が「国文学に対する反省と自覚」という文を寄せ、「平和の中に、文化日本を建設すること」を戦後の国文学者の責務であると主張しつつ、「文学の普遍性、世界性を明らかにしてゆくことが必要になる」と論じていた。

ともあれ日本文学の研究に於て日本文学を世界の文学との関連に於て扱ふということは今後に於て一層重要な課題となるであらう。世界文学としての日本文学は決して日本文学の特殊性、独自性を無視することではないが、同時に日本文学を独尊的に見るのではなくこれを世界の文学の中に於てその独自性を見ることによつて文学的的定位を与へることであらう。この関係は日本精神と世界精神との関係にもなる。単に日本だけのものではなく世界の精神にも通ずるものがある筈である。戦争中には日本精神が排他的のやうにも誤解された点もあるけれど、日本精神は決して排他的孤立的ではなく、調和的包容的な精神であり、世界精神と反撥するものではない。ただ日本的なるものを根底に有して而も世界的である所に日本精神と世界精神との調和も認められる⁹。

戦時期の国文学界には「独尊的」なところがあったと述べ、それを脱するために世界との「調和的包容的精神」を重視すべきと説いていたのである。そして久松は、そのために国文学者は、『万葉集』や『源氏物語』を、「独善的に尊重」するのではなく、「ホーマーやダンテ、シェイクスピア、ゲーテ等、世界の最高の文学とされるものと比較し、その位置を判定する」べきであると主張した。比較文学研究の視点の必要性を訴えたのである。こうした主張は当時、『文学に現われたる我が国民思想の研究』（洛陽堂、一九一七～二一年）で知られる歴史学者の津田左右吉からも提出されており、津田は一九四七年一月に論文「世界文学としてのニホン文学——文学の比較研究について——」の中で、「現代文化は一つの世界文化であるにしても、それには民族による特殊性が含まれている」と述べて、民族の特殊性を単位とした文学の国

9 久松潜一『国文学に対する反省と自覚』（注3前掲誌）。

際的な比較研究の必要性を訴えていた¹⁰。一九四八年一〇月には『国語と国文学』で「比較文学」の特集が生まれ、島田謹二「比較文学の輪郭」、吉田精一「比較文学について」、吉田幸一「上代詩並に西鶴に於ける遊仙窟的要素」、神田秀夫「白楽天の影響に関する比較文学的一考察」の四つの論文が掲載された。また一九四九年九月の『国文学 解釈と鑑賞』も「世界文学史と日本文学史」と題する特集を組んでおり、国文学界で比較文学が重視されていくことになる。

そして、それに呼応するかのようになり、戦後日本で、比較文学の学会活動が開始されることになった。第二次大戦前の日本では、野上豊一郎、太宰施門、島田謹二、小林正、太田咲太郎らによりフランスの比較文学理論が紹介され、徐々に本格的な研究が始められようとしていたが、独立した学会として機能するまでにはいたらなかった。しかし、一九四八年には中島健蔵の提唱で日本比較文学学会が創立された。一九五三年には日本で初めて比較文学比較文化専門の課程が設立され、翌年には島田謹二を会長に東京大学比較文学学会が発足した。一九五〇年代には、中島健蔵・中野好夫監修『比較文学序説』(河出書房、一九五一年)、『比較文学——日本文学を中心に——』(矢島書房、一九五三年)、島田謹二『比較文学』(要選書、一九五三年)、『比較文学研究 I 比較文学——問題と方法 漱石の比較文学的研究』(矢島書房、一九五四年)など、比較文学に関する書物が多く出版されることになる。

中島健蔵・中野好夫監修『比較文学序説』の「序」で中野好夫は、比較文学研究の意義について、「それは政治的、社会的にも十九世紀のナショナリズム全盛時代が超克されて、一つの世界をみざす今世紀の世界連帯の精神がもはや必至となるに至った情勢と相対応するものだ、私は信じている。つまり文学も、もはや国民文学至上の孤立時代ではありえなくなった」¹¹と述べていた。ここには、第二次世界大戦での日本の偏狭な国粹主義に対する反省と、戦後の国際社会への日本の参画に対する、文学研究者の貢献の役割に対する思いが表明されていたといえるだろう。

また、佐藤泉の近年の研究によれば、文学の普遍性・世界性をめぐる言説は、当時の高等学校の国語教科書にまでも反映されていたという。当時の国語教科書の多くは文学史の記述を

10 津田左右吉「世界文学としてのニホン文学—文学の比較研究について—」(『文学』一九四七年一月)。

11 中島健蔵・中野好夫監修『比較文学序説』河出書房、一九五一年。

重視しており、そこでは「自我」や「個人」、「近代精神」の覚醒の歴史を追う近代主義的な文学史の枠組が用いられていた。そして多くの国語教科書が、戦時期の国家主義・国粹主義を批判し相対化しようとする目論見から、近代的な個性や自我をうけとめる器として、「普遍性」「世界文学」の重要性を説いていたという¹²。たとえば、大正期に書かれた土居光知の論文「世界的文学と国民的文学」がしばしば高等学校教科書に採録されており、また、自然主義・私小説に代表される特殊日本的な素朴なリアリズムから距離を置いていた普遍的・世界的な文豪として、夏目漱石が国語教科書の中で重視されたという。

戦後におけるこれら多くの普遍性をめぐる言説は、少なくとも主観的には、戦時体制に対する反省の弁としてあらわれたものである。文学研究者や批評家、教育者の多くが、戦時下の日本の文学研究が他国を顧みない偏狭な国粹主義に陥ってしまったと考えて、世界的・国際的な見地から新しい文学研究を再建しようとする主張をおこなったといえる。

だが一方で、当時の世界文学や日本文学の世界性、比較文学をめぐる議論は、戦時中の日本のナショナリズムを、たんなる前近代的な自民族中心主義の狭い範疇に押し込め、その本質の一端を見えなくさせてしまった一面があったのではないだろうか。そうした言説は、それを生み出した根元的な枠組であったはずの近代国民国家の枠組自体の原罪的性格を見えなくさせてしまったと考えられる。戦時期の日本の軍国主義とは、けっして前近代の国学的なエスノセントリズムと鎖国主義のみで成り立っていたものではなかった。戦時期のいわゆる軍国主義は、あくまでも資本主義の近代世界システムに組み込まれたうえでそのなかでの国際的な覇権を争う、明治以降の近代国民国家の一形態として形成されたものだったからである。

そして、そもそも日本文学の世界性や国際性は、戦前から絶えず議論され続けてきたものであり、戦後になって初めて議論されるようになったものではなかった。明治以降の国文学および日本文学は、近代日本の国民国家形成のうえで大きな役割を担うものとして創出された側面が大きい。それは、明治以降の日本で国民・民族の感情的な共同体性を確立するための手段だった。そして、こうした国民国家の学問としての国文学は、民族的な自己同一性と特殊性を確保するために、つねに、普遍性あるいは世界性の問題と向かい合う形で展開していたのである¹³。

12 佐藤泉『国語教科書の戦後史』勁草書房、二〇〇六年、1～51、79～90ページ。

13 笹沼俊暁注2前掲書。

一八九〇年に刊行された日本で最初の文学史である三上参次・高津楯三郎『日本文学史』は、テーヌの文学史の手法に依拠しつつ、それぞれの国における「其固有の特質」を具えた文学を「国文学」と呼ぶとする一方で、「人をして、高尚、優美、又、純潔なる、精神上の快樂を、感ぜしむる間に、道德、宗教、真理、及び美術上の觀念を起さしめ」るようなものは、「何国の文学にも適用して、不可なきのみならず、特にかの所謂世界文学(又は万国文学)なるものに適合」¹⁴すると述べていた。近代日本で初めての日本文学史で、国文学は「世界文学」を対概念とするものとして位置づけられていたのである。日本文学史は、そのナショナルな自己同一性と特殊性を、西欧の文学概念の普遍性との対比をとおして形成し、みずからを主張したのである。

普遍性と特殊性をめぐるこうした文学史の枠組は、その後さまざまに形をかえて継続した。大正期のいわゆる国際協調主義の時代には、土居光知『文学序説』(岩波書店、一九二七年)のように、西欧の文学を普遍性の基準のもとで、日本文学の特殊性を否定的にとらえるかたちで表象する言説があった。昭和期にはいと、その反発として日本主義的な時代風潮のもと日本文芸の独自性を肯定的に表象し、さらには日本の文芸様式こそが西欧にもまして普遍的であるとする岡崎義恵の『日本文芸学の様式』(岩波書店、一九三八年)などがあらわれた。国文学をめぐる普遍性の言説は、国民国家としての「日本」の自己同一性を前提として、それをより強化し時には拡大すらさせる言説として、明治期以降、昭和の戦時期にいたるまで繰り返して再生産され続けたのである。

さらに昭和戦時期には、大東亜共栄圏と八紘一宇の政治スローガンを背景として、国文学の特殊・固有な性格はそのままに世界的な価値をもつとする、ある種の普遍主義・世界主義言説もあらわれていた。それは、保田与重郎や蓮田善明のような日本浪漫派系の文芸評論家はむろん、久松潜一や岡崎義恵のようなアカデミックな国文学者たちの言説からも見てとることができる。

万葉集がドイツでは古くから研究されてきて、フローレンツ教授の如きは日本に居られる間も、向ふに帰られてからも数十年の間万葉集を最も中心に研究して向ふに伝えて居るが、その他、源氏物語・古事記にしても、かういふ代表的な日本文学が日本国内のみな

14 三上参次・高津楯三郎『日本文学史』上、日本図書センター、一九八二年、25ページ。

らず東洋全体に或は西洋の凡ゆる方面に於て研究されつゝある事は、それによつて日本文学の普遍性もしくは世界性といふものが一層はつきりして来たといふことになる。その場合どこまでも日本文学としての本質や特色を以てそれが世界性を有して来るのである。(中略)日本は今日東亜の新しい秩序建設のために邁進しつゝあるのであり、肇国以来の精神が新しく自覚され国民全体が一丸となつて、天皇の御稜威のもとに忠誠を尽してゐるのであるが、この精神の上に立つことによつて新しい東亜の秩序が建設されるのである¹⁵。

さきにも見たように、戦後直後の久松潜一は、国文学研究の独尊性を批判し、戦後の社会に適応しうる世界的・国際的な視野をもった研究の必要性を主張した。だが、戦時下においても久松は、同様に国文学の国際的・普遍的性格の研究を訴えていたのである。ただ、戦時中の彼が考えていた国文学の普遍性・世界性が、ヨーロッパの視線を相変わらず強く意識しつつも日本を中心とした戦時期の大東亜共栄圏の枠組を前提としていたのに対し、戦後のそれは、大東亜共栄圏の夢が崩壊し、アメリカ合州国を中心とした連合国軍によって日本が占領されるという新たな国際状況に対応する文脈のなかで主張されたものだった。そしてそこには、藤村作と同様に、戦争責任の追及を免れようとする動機が強く介在していたといわざるをえない。

久松のみならず、戦後の多くの国文学者や比較文学者は、戦時期の国文学の「独尊性」「国粹性」を批判し、文学の世界性や普遍性・国際性について議論した。だが実際にはそれは、彼ら自身の言うような戦前・戦中の「鎖国」から戦後の「開国」へ向かう動きだったというよりも、国民国家・日本の備品としての国文学・日本文学の枠組を、戦後の新たな国際的枠組のもとで延命させる行為だったといえる。国文学の民族的な枠組の連続性を保証してくれる背景としての国際性・普遍性・世界性を、戦時中の大東亜共栄圏の思想から、戦後の国際環境を前提とした

15 久松潜一『国文学通論』東京武蔵野書院、一九四四年、392～394ページ。戦前・戦中の大東亜共栄圏や八紘一宇の言説を背景としての国文学の「普遍性」「世界性」の議論については、安田敏朗注7前掲書を参照。安田は、戦前・戦中の久松潜一が、国文学にこめられた日本精神の普遍性を説いていたことを指摘し、それは当時の「外地」における「国語」普及運動と連動する言説だったと述べている。そして、戦時中には、日本精神を主とした八紘一宇をとんでいたにもかかわらず、敗戦後には、外国に基準をおいてそこから評価されれば普遍性のお墨付きをもらえんとする論に転換していったという。「敗戦後、ひとたび「世界平和」という「世界精神」が外部からやってくると、あきらかにそれを「主」として「日本精神」と連結させる主張をおこなったのである」という。

ものへと移行させたのである。そのなかで、国民国家の学問としての国文学の枠組の継続的な再構築を目指そうとしたといえる。

そして、第二次世界大戦後の日本における文学の普遍性・国際性をめぐる議論の特徴として、ここでもう一つ、マルクス主義思想の影響の大きさに注目してみたい。戦後の日本社会では、共産党と社会主義思想が知識人の間で絶大な影響力をもった。それは国文学をめぐる言説においても例外ではなく、当時、社会主義の国際性を前提としての日本文学の世界性と国際性についての言説が多く登場したのである。

たとえば雑誌『近代文学』の同人で、文学者の戦争責任を追及した小田切秀雄は、一九四七年に「世界文芸といえば、重慶、昆明と延安との二つの中国からの新しい文学の生成(たとえば最近さかんに紹介されている丁玲をはじめとして)、フランスでのルイ・アラゴンやアンドレ・マルロオやジャン・ゲエノ等の革命的インテリゲンチヤ文学の発達、戦後のソビエト文学の新しい動き、等々がなまなましい力でわたしたちの胸に伝わりはじめている」と主張し、「これらの文学がそれぞれの国の特殊性に深く根ざしながらいずれも新しい民主主義的な傾向をもって出てきている」¹⁶、と述べていた。国別の特殊性を前提としながら、文学のマルクス主義的な世界性・普遍性に目を向けるべきとする言説である。

また、岩波書店の雑誌『文学』では、当時たびたび海外の文学状況の紹介や考察がなされており、そこでソ連や中国の文学に対し高い関心が示されていた点を見逃せない。一九五〇年五月の『文学』は「近代文学の創出過程」という特集を組んでいるが、そこではイタリア、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカの近代文学創出過程を考察する論文とともに、角圭子「ロシア近代文学の形成過程」、さねとう・けいしゅう「中国近代文学の創出」が掲載されていた。さらに一九五三年九月号は「中国文学と日本文学」を特集しており、社会主義革命を達成した中国の文学に対する高い関心が伺える。また一九五四年には「社会主義諸国の文学」の特集が組まれ、鹿島保夫「ソヴェト作家同盟」成立前史」、檜山久雄「中国文学の新しい動きだし」、道家忠雄「東独の文学における最近の問題」、井上満「戦後ソヴェートのゴーリキー研究」が掲載されていた。

こうした社会主義諸国の各国文学に対する関心には、一九五〇年前後にたびたび交わされた、いわゆる「国民文学論」と共通する時代背景があったといえよう。国民文学論は、第二次

16 小田切秀雄「岡崎義恵「世界文芸学序論」批判」(『文学』一九四七年五月)。

世界大戦終結後の新しい世界情勢の中で、どのように日本という民族的枠組を構築しなおすかという問題意識から議論されたものだからである。そこには、アメリカ合州国に代表される資本主義諸国の国際秩序の中で「日本」の自己同一性を確立させるべきか、あるいはソビエト連邦や中華人民共和国に代表される社会主義諸国の世界秩序に連なる形で「日本」を形作るべきかという対立点があった。それは、冷戦下の国際環境下で日本文学あるいは国文学の民族的枠組を再構築する上での、避けて通ることのできない対立点だったのである。

4 西郷信綱と大東亜共栄圏

このように、第二次世界大戦後の日本では、軍国主義と大東亜共栄圏という戦前・戦中の背景が崩壊した後での新たな国際環境のもとで、いかにして国文学の民族的枠組を継続させ、あるいは再編成させようとするかの議論がなされた。では、戦後のこうした新たな環境下で、具体的にいったいどのような国文学論が展開されたのだろうか。戦後における代表的な歴史社会学派の国文学者の一人である、西郷信綱(一九一六～二〇〇八年)を例として見てみよう。西郷は、戦前・戦中から戦後にかけて多くの「大家」が延命を計る中で、それに対する批判的意識から新たな研究の構築を目指した代表的な一人だったからである。

西郷信綱は、一九三五年に東京帝国大学英文学科に入学したものの齋藤茂吉の短歌と出会ったことをきっかけに国文学科へと転じ、国文学の道を選んだ。アララギ派の歌人として活動し、戦後は「歴史社会学派」を代表する一人として『貴族文学としての万葉集』(丹波書林、一九四六年)、『国学の批判』(青山書院、一九四八年)、『日本古代文学史』(岩波書店、一九五一年)、『詩の発生 文学における原始・古代の意味』(未来社、一九六〇年)、『古事記注釈全 4 巻』(平凡社、一九七五～一九八九年)など多くの著作を刊行した。一九五〇年代前後には、中世文学の永積安明、近世文学の広末保、近代文学の猪野謙二らとともに、国文学研究における国民文学論の代表的な論者として活動した¹⁷。

17 西郷信綱については、個別の著作についての書評のほか、藤井貞和「西郷信綱論—「国学の批判」の成立」(『日本文学』一九七八年一〇月)、神野藤昭夫「批評としての「古代」—西郷信綱「日本古代文学史」の問題」(『日本文学』一九八二年一〇月)、呉哲男「国文学/国学批判—西郷信綱の

西郷信綱が若手国文学者としてその研究成果を公にしはじめたのは、戦時期の一九四〇年代初頭だった。身体上の理由から、また海軍予備仕官を養成する清水高等商専学校教授だったことから兵役を免れ、『国語と国文学』に近世国学や万葉集、佐藤春夫文学についてのいくつかの論考を発表しはじめた。当時発表した本居宣長の文献学の思想を検討した論文には、戦後の彼の国文学論を特徴づける批判的精神が早くも盛り込まれていた。だがそれは同時に、戦時期の戦争遂行の言説とも、感性的にはともかく少なくとも論理的には整合性をもつものでもあった。

一九四三年六月の『国語と国文学』に掲載された論文「文献学の人間的背景—本居宣長論—」を見てみよう。この論文は、本居宣長の国学の思想的な論理と歴史的位をを検討したものであった。それを通じて、戦時期の当時における国文学研究、特に文献学の批判を企図したのである。西郷によれば、本居が深い影響を受けた徂徠学派は、朱子学的な「理」を基準として古典を解釈するのではなく、文献に対する帰納的・実証的な検証——「科学的処分」をおこなおうとするものだった。同様に、本居の国学もまた、客観的な事実としての古典の記述を実証的に検証しようとする点で、近世における「自主的人間的自覚」の生んだ「進歩的科学」だったという。ただし本居における実証性とは、文献の帰納的・経験的な認識のみを行うもので、法則的な広い「科学的世界観」としては発達しなかった。そのため「社会・文化の合理的把握」については、人智を超えたものとして断念する不可知論に陥るほかなかったというのである。

そのことは、文献学のみならず蘭学をはじめとした当時の科学一般の限界とも通底する限界だったという。西郷によれば、そのことは、近世における「人間的自覚」が、「社会的に伸長できなかつた「私人」的人間の自覚」にすぎなかったことに由来した。近世の学問は、封建社会に対し意識的に市民権を主張する社会的主体によるものではなく、私人的・経験的な技能に過ぎなかつたため、市民社会的な広がりの中での演繹的な科学体系が発達しえなかつたのだという。

「読み」をめぐる」(『日本文学』一九九七年一月)、三谷邦明「忘れもの—西郷信綱『日本古代文学史』を読む—あるいは外部へのそして外部からの眼差しをめぐる」(『日本文学』一九九七年一月)、三浦佑之「西郷信綱研究—初期著作をめぐる」(『国文学 解釈と鑑賞』二〇一一年五月)等が、思想的に対象化した検討をおこなっている。しかし、第二次大戦後の冷戦下の国際環境で、国文学がどのように学問的枠組を組み替えようとしたかについて、ケーススタディーとして取り上げた研究はこれまでのところあらわれていない。

宣長はあらゆる合理性は「己が心を信ずる」ことに由来する個人のさかしらであると云った。さうして実証的文献学を主張した。前にも述べたやうにこの発言は、当時の十八世紀日本の歴史的段階に於ては、朱子学流の観念論を止揚するものとして、至大の進歩性を持ちえたのである。然し十八世紀に於けるこの発言を、二十世紀の現代に於てそのまま信奉することに、同様の進歩性が保証されるとは限るまい。寧ろ保護されるものはその反動性に外なるまい。宣長以後、すでに明治維新を含む一世紀半の時間が流れてゐるのである。日本は最早、島国の封建日本ではなく、東亜の盟主たるべく大きく飛躍しつつある日本である。このやうな輝かしい御代にある我々にして、宣長と同じやうに「己が心を信ずる」は個人のさかしらにすぎぬといひうるならば、それは一体いかなる立場であらうか。(中略)

産業の世界にあつても、経験的・肉体的労働の限界は日々に縮小され、合理的生産方法がこれに代りつつある。そして最もおくれた経済部門であるといはれる農業の世界でも、かの一本の雑草も生やさじと超人間的勤労にいそむ篤農家も、自分の経営に関するその驚くべき精密な「実証性」にもかかはらず、その労働生産性の驚くべき非能率性・非合理性において、いまや、日本農業の経済的発展を制約するブレーキと化しつつあることを説かれてゐる¹⁸。

本居宣長の国学は、当時においては確かに近代の方向に向かう進歩性のある程度までもっていたが、その経験主義的な思想形態を総力戦大戦下の現代産業社会でそのままに採り入れるべきではないと、西郷は指摘した。西郷にとって、近世国学の科学性は素朴な経験主義的実証の域に留まっており、近代の科学的世界観や社会的主体性の意識の欠落という歴史的限界をかかえたものにすぎなかった。それをそのまま、二〇世紀における総力戦体制と大東亜共栄圏建設下の思想規範とするのは時代錯誤だと批判したのである。

ここで彼は、戦時期における国策と合体した国文学者たちとともに、若者達に人気を博していた日本浪漫派の文学者による、「近代の超克」論の一環としての国学論に対する批判を企図していたといえる。当時、久松潜一らの国文学者は「新国学」を標榜し、西洋の近代学問に

18 西郷信綱「文献学的人間的背景－本居宣長論－」(『国語と国文学』一九四三年六月)。

対する日本の国文学＝国学の優位性を主張していた。そして、国策と直接結びついた国文学アカデミズムとは別の立場から、むしろ体制批判的なスタンスにおいてではあるものの、日本浪漫派の代表的批評家・保田与重郎らもまた、近世国学を奉じていた。論理を超えた絶対性において日本の「国体」の優位を主張し、その根拠として近世国学の絶対的正当性を主張していたのである¹⁹。

しかし、戦時期の西郷信綱による国学・文献学批判は、このように同時代における「近代の超克」論に対する批判であると同時に、当時の総力戦体制に対してより効率的な貢献をなしうる社会思想の構築を訴えるものでもあった。先の引用箇所でも西郷は、近世国学の実証学問を、農業における前近代的な「経験的・肉体的労働」と等値し、一方で、あるべき新しい国文学を「日本農業の経済発展」をささえる「合理的生産方法」に等値しているからである。むしろ当時の西郷の内心としては、国文学が目指すべき社会的な視野とは、本来、マルクス主義的な革命を前提とした社会科学の認識に基づくべきものであったと想像される。しかしそれは、当時における国文学界や日本浪漫派に対する批判ではあっても、戦争遂行そのものに対する批判ではなく、「島国の封建日本ではなく、東亜の盟主たるべく大きく飛躍しつつある日本」に対する寄与の文脈のなかで主張されざるを得なかった。国文学は、狭い文献学の領域に止まらず、国力増強と大東亜建設をより合理的にサポートするための、いわば広い社会科学的視野をもつ学問として、再構築されなければならない。彼の主張は、戦時下の論理と矛盾なく接続し得る論理的側面をもっていたことも確かなのである。

しかし第二次世界大戦の終結後、西郷は、そうした侵略戦争を肯定する文脈での議論をとりやめた。西郷は、戦時中に書いた国学論をもとに大幅に改稿したものを、一九四七年に『国

19 笹沼俊暁注2前掲書。ちなみに、こうした西郷の国学論は、同時代における政治学者の丸山眞男や、清水高等商専学校における同僚であった歴史社会学派の国文学者・風巻景次郎の影響を受けて書かれたものだったと考えられる。戦時中に執筆され、戦後に『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二年）として刊行されることになる丸山眞男の近世儒学および国学思想についての論文の骨子は、近世における朱子学の静的秩序とそれを支える思惟様式が、徂徠や宣長らによって近代的な「政治」や「文芸」が見出されることで次第に崩壊していく過程を描いたものである。また風巻景次郎は「『ものゝあはれ』論の史的限界」（『文芸復興』一九三七年七月）で、近世の公的世界の儒教的価値観の及ばない独自の領域において町人たちが自己主張をおこなうために開拓した「文芸意識」として、本居の「ものゝあはれ」論を位置づけていた。丸山にせよ風巻にせよ、近世国学を近代的な自我や主体性の自覚の先駆としてとらえたうえで、それが結局は封建制そのものを批判・打破する社会認識とはなりえなかった限界性を批判していたのである。近代性の限界の指摘という点で、西郷の国学論は、彼らと共通したものである。

学の批判——封建イデオログの世界——』という名の単行本にまとめて出版した。そこでは、戦時中の「日本は最早、島国の封建日本ではなく、東亜の盟主たるべく大きく飛躍しつつある日本である。このやうな輝かしい御代にある我々にして、…」という侵略戦争・大東亜共栄圏の肯定や天皇賛美の文句を、「日本は最早、島国の封建日本ではなく、世界的連関のなかに大きく伸びようとしてつつある日本である。このやうな時代になる我々にして…」というように書き改めていた。

そして単行本の出版に際して付け加えられた「第三章 新しい学問の主体」では、戦時期における国文学界の戦争責任を追求していた。彼によれば、超国家主義への献身ということは、明治期に確立された時から、国文学という学問の目的そのものであり続けてきた。市民的理性による国家権力からの学問と解放ではなく、権力への隷属と奉仕こそが、国文学の理想とされてきたという。そしてそうした国文学には、社会的な意識をもつ近代市民的自我が不在であり、そのため文献学は近世国学と同様に「手工的一技術」にすぎなかった。そのために「専制権力」と結びついて日本近代化を阻止する精神エネルギーの源泉となってしまったという。

つまり、文学研究における近代的な自我を、天皇を頂点とした超国家主義のもとでの戦争遂行のためではなく、それを批判し打破し得るものとして位置づけた。国家主義による上からの専制を批判しうるものとして、新しい国文学の構築を訴えたのである。だが、こうした戦前・戦中との断絶性を指向する論理の一方で、西郷の主張は、総力戦体制の論理の枠組をそのままそっくり残すものでもあった。戦後の西郷は、戦時中の論文を戦後に刊行するにあたり、「東亜の盟主」「輝かしい御代」という言葉を削除していたが、先に見た農業生産における合理化や日本経済発展についての記述はそのまま残していた。国文学の発展を通じての国力の増強について、むしろより明確に主張したのである。

おしなべて、国学伝統に立つ現代国文学の立場からなされる日本文学の研究では、古典がそれぞれの環境に持つたところの独自の歴史的研究は捨象され、あるひは歪曲されてしまひ、従つて文学史は、味気ない作品年代誌に終るか、それとも、明治以後の文学と同じやうな小市民文学の系譜と化せざるをえないわけである。

個人主義の否定が声高く叫ばれながら、学問方法にまつはるかうした個人主義が疑はれないでゐるのは、ずるぶんと変である。個人主義といふからには、単に私的営利を追求

する精神だけを指すのではなく、もつと広い歴史的な幅と構造をもつたものとして理解すべきであると思ふ。(中略)

しかし一見形而下のこととしか思へない学問倫理のかうした個人主義が、国の文化生産力の高まりを阻害する点は、決してゆるがせにはできない。先づ学問は完全に近く、国民生活から遊離する。私小説の名を以て呼ばれる個人主義が、国民生活の実践と縁のない一部知識人の自己分析であつたり、自己抒情であつたりするのと同じ意味で、学問も、一部知識人の白日夢にすぎなくなる²⁰。

ここでの批判は、池田亀鑑ら東大アカデミズムを中心とした当時の国文学の文献学的研究のあり方に対し直接向けられたものである。池田亀鑑は、平安文学の厳密な文献批判をおこなう一方で、「自照文学論」という文学論を展開していた。平安期の女流日記文学等を作者の自意識の描写として評価する文学論であるが、講義等を通じて披露される彼の文学論はしばしば「少女趣味」と呼ばれて揶揄されたりもした。西郷は、そうした池田に代表される東大アカデミズムの文献学を、「味気ない作品年代誌」と「小市民文学」の同居として蔑んだのである。その二つの要素は一見矛盾するようだが、社会的な主体意識が欠落している点で同根である。西郷のほかにも、戦後の日本では、戦前・戦中の軍国主義の台頭を抑えることが出来なかったことへの反省から、『近代文学』派をはじめ多くの知識人が、広い社会への広がりをもつ主体性や個人の重要性を説いていた。草花や恋愛などの甘い詩を歌う文学者や読者が、戦争に積極的に荷担したことを批判した、加藤周一らによる当時の「星董派論争」もその背景にあつたろう。

だが、西郷がここでいう社会性とは、戦前・戦中における総力戦体制の論理から、大東亜共栄圏と天皇制賛美の部分のみを除くことによって、戦後の論理へとそのまま接続させたものだった。「文献学は集团的工房のなかに組織され、もつと合理的・能率的に機械化される必要があるだらう。さうして始めて国学の伝統は近代的に止揚され、終焉する。何故ならその時、それに従事する人間もまた、近代市民として主体化し社会化する契機を与えられるからである」と彼は述べていた。ソビエトの計画経済を意識した集団組織性の比喻で国文学者の主体化を図っているのである。

20 西郷信綱『国学の批判 一封建イデオログの世界一』青山書院、一九四八年、185～187ページ。

戦時期から戦後の自民党政権にいたるまでの「一九四〇年体制」と呼ばれる日本経済のシステムは、満州国経由でのソビエトの計画経済の影響が強いといわれる。戦時期のいわば社会主義的な動員体制が戦後の日本の経済を支えたわけだが、そうした戦中・戦後の連続性と転倒が、西郷の国文学の論理にも投影されていたといえるだろう。戦前・戦中からの連続性を前提とした上で、戦時体制の構築から天皇制国家体制の批判へと政治的な主張の方向性を裏表に逆転させようとしたのである。西郷信綱の戦後の国文学研究もまた、戦前からの連続性のリボンを裏返しにねじったものとしてスタートしていたといえるだろう。

そして、戦時期の西郷信綱の国文学論は、たとえそれが厳しい時局のなかで自らの主張をギリギリのところまで主張するための方便であったとしても、日本を中心とした大東亜共栄圏の構築という、当時のある種の世界思想・普遍思想を前提としたものだった。国文学は大東亜共栄圏構築の貢献に耐えうるものでなければならず、それゆえに近世国学の前近代性は批判されなければならなかったのである。だが、戦後の西郷信綱は、そうした線時期の日本の普遍思想を切り捨て、新たな国際文脈のなかで国文学のナショナルリテラチャーを主張することになった。

5 『日本古代文学史』と東西冷戦

戦後の西郷は、日本が海外植民地や占領地を喪失した戦後の国際状況の中で、それに見合う形での国文学論を展開することになった。朝鮮半島や台湾等を除外したいわゆる「日本内地」のみのサイズを前提として、戦後的な国際環境の中での日本文学の民族性と世界性を論じる国文学論である。一九五〇年代に日本の知識人の間でさかんに議論された「国民文学論」を背景として西郷が提出した日本古代文学論には、その性格が如実にあらわれていた。

日本の戦後社会は、敗戦直後からしばらくして一九五〇年代になると、大きな転換期を迎えることになった。中国の国共内戦における国民党軍の敗走や朝鮮戦争によって、東西冷戦が激化し、アメリカによる占領政策が大きく転換したからである。一九四五年の日本占領開始後、戦後に再建された日本共産党はアメリカ軍を解放軍として規定し、GHQ側も労働運動を容認していた。共産党の党勢は拡大し一九四七年二月一日には大規模なゼネストを計画したが、結局マッカーサーの命令により中止されてしまう。さらに一九五〇年になると共産党員二四人

の公職追放がなされるなど、いわゆる「逆コース」が開始する。共産党首脳は北京へと逃れ、コミンフォルムからの平和革命路線に対する批判もあって日本共産党は混乱状態に陥り、徳田球一ら主流の所感派と国際派、およびその他のグループへ分裂してしまう。そして、民族主義に立つ主流の所感派を中心に武装闘争路線へと統一化が進められ、翌年には毛沢東にならった山村工作隊が組織される。さらに、一九五一年のサンフランシスコ講和条約締結にあっては、単独講和論か全面講和論かをめぐって国論が大きく二分され、共産党や進歩的知識人の多くは「アメリカ帝国主義」への反発とナショナリズムの立場を表明した。こうした動きが文学評論活動として表れたのが、いわゆる国民文学論だった。

戦後の国民文学論に参加した論者は広範にわたり、議論にすれ違いや混乱、繰返し等も多い。しかし、その問題が多くの耳目を集めるきっかけとなったのは、周知のように竹内好の論文「近代主義と民族の問題」である。この論文は、雑誌『文学』一九五一年九月号の特集「日本文学における民族の問題」に掲載されたものだった。竹内によれば、戦争中の「血ぬられた民族主義」への苦い経験から、戦後、多くの人々が民族の問題を思考回路に含まない「近代主義」に陥ったという。しかし日本浪漫派に代表される戦時期の民族主義を倒したのは外の力にすぎず、近代主義者たちが自ら対決して倒したわけではなかった。正面から対決せずに抑圧したものは、やがて反発の機会を狙うだろう。「国民文学」がひとたび汚されたとしても、国民文学への念願を捨てるべきではなく、民族の伝統に根ざさない革命はあり得ない、と竹内は主張した。

竹内の論は、用語や概念の未整理も多く、必ずしも論理的に読めない部分を少なからず含んでいる。竹内は、国民と民族の語をほぼ同じ意味で述べ、その肯定的な側面の掘り起こしを主張しているが、この両者が等価で結ばれること自体、日本＝単一民族という戦後的な倒錯を前提としている。そしてそもそも現在の視点からすれば、国民や民族は近代以降の概念であり、民族主義と近代主義は矛盾するものではない。この点は、すでに当時から福田恒存によって「「国民が形成されるのは近代以後」といふ文句のなかの国民といふ概念も近代といふ概念も、まったく、西欧的なものであり、近代的なものである。かういふ近代西欧的な概念で国民文学論を唱へるといふのは、いつたいどういふ意味をもつのか」²¹と批判されており、またそ

21 福田恒存「国民文学について」(『文学界』一九五二年九月)。

もそも「国民」が近代の資本主義社会で形成されることは、戦前からのマルクス主義歴史学の考え方だった。

だが当時は日本共産党自体、民族主義の立場を重視する所感派が主流派となっており、マルクス主義歴史学も、一九五〇年以後には多くの場合、「国民的歴史学運動」を通じて、あたかも古代から現代に至るまで日本民族や国民が自明のごとく存在したような歴史を描き出していた。歴史学者の石母田正は一九五〇年の『前衛』にスターリンの言語学論文が翻訳掲載されて以降、神話や民話、民謡など「近代主義者」が「後進性」「前近代性」を見出したものの再評価を主張した。近代以前に民族は存在しないという考え方は、「大衆」を無視したものだとしたのである²²。

こうしたなか一九五〇年代には、西郷信綱もまた、民族主義を見直す作業をおこなうことになった。さきに見たように、それまでの彼は、明治以降の日本に残された前近代的・後進的要素を批判し、近代的な個人に基づく国民の建設を主張していた。しかし一九五一年九月の『文学』に、竹内好「近代主義と民族の問題」とともに掲載された「動向 文学における民族—反省と課題—」で、彼は日本文学における前近代的な要素を肯定的に掘り起こす作業の重要性を述べた。そこで西郷は、近代日本文学が多くの優れた作品を生み出しつつも結局、「真に世界的な作品」を多くつくりだせなかったとしながら、一方でその理由を、近代日本が典型的なブルジョワ革命をへなかったという点だけから説明するのは、「一の社会学的な俗論」だと指摘した。そうした論理では、典型的な市民社会ではなかった中国や十九世紀ロシアが、魯迅やプーシキンその他の優れた作家を生んだわけを説明できないからだという。

封建的なものとたたかうとともに資本主義的開化ともたたかうことなしにはおのれを形成しえぬという自己矛盾を、近代文学は一般的にもつのであるが、この法則を中国とロシアは、きわめて独自の、すぐれた民族形式を以て貫徹した。それはこの両国が、人民の力で資本主義を克服した最初の国となったそのたたかひのエネルギーとも、いうまでもなくふかくつながっている。

22 小熊英二『民主と愛国 戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、二〇〇二年、324～326ページ。

明治文学のなかには、このような生きかたが存在した。プロレタリア文学のなかにもそれは部分的に存在した。しかし一般的に、とくに私たち大正期以後の知識人は、その大多数が、「上から」と「外から」の近代化の波にまきこまれ、人民との、そして民族伝統との生きた生活的なつながりをもたぬコスモポリタンになるか、ないしはイデオロギーや世界観の上でのみ人民とつながる孤立した「良心的・進歩的インテリゲンツィア」になるかしていったと思う²³。

戦前から戦後にかけて、マルクス主義講座派の歴史学は、明治以降の日本の特質を、近代資本主義を発達させながらも前近代的・封建的な要素が残存する後進性に求めている。従来の歴史社会学派の国文学者もまた、そうした枠組のもとに国文学の前近代性を批判した。しかしそれに対して西郷は、ここで、近代日本文学の欠陥の由来を半封建制の残存からではなく、国家権力と外来文化による、知識人の「民族伝統」と「人民」からの孤立に求めた。彼の考え方では、ロシアや中国の知識人は人民の民族伝統との結びつきの中から革命的な文学を生み出し得たという。そして西郷は同じ年に、日本の古典文学のなかに肯定的な「民族伝統」と「遺産」を見出そうとする、まとまった研究成果を発表した。初期の西郷の代表作である『日本古代文学史』(岩波書店)である。

『日本古代文学史』は、記紀神話から平安末期にいたるまでを「古代文学」として、その歴史展開を法則的に描き出した著作である。西郷によれば、古代文学には「原始の無階級社会」が作り出した「人間の真実の姿」が素朴に生き生きと表現されている。社会主義への転換期を生きつつある現在こそ、そうした「民族的伝統」を「遺産」として継承発展してしなければならないという。そして西郷は、古代文学史の展開の法則性を、叙事詩・抒情詩・物語という文学ジャンルの交代によって説明していた。

まず叙事詩の時代は、『古事記』のスサノオに代表される「英雄」によって規定される。英雄とは、原始社会の停滞的・非個性的平等を打ち破る個性にはかならない。組織された国家機構の専制君主である後世の天皇とは違い、この時代の英雄は「集団全体を自己のなかにつつみこみ、集団を一身に代表する体現者であり、身を以て集団とともに生きる場所の偉大な典型

23 西郷信綱「動向 文学における民族—反省と課題—」(『文学』一九五一年九月)。

的個性]である。そしてそれは「プロレタリアートの英雄においてのみ再現するところの独自の人間像」だったが、結局英雄叙事詩としてのまとまった作品を形成するには至らなかった。

次に、巨大な前方後円墳に象徴される専制政治体制が確立すると、そうした社会秩序と対立的に、人間精神の内面化が進行し、抒情詩の時代が到来する。『万葉集』において抒情詩は、天皇から民衆にまで全階級にまでわたって開花した。その基盤となったのは、もともと短歌形式として広く民衆の間に流布していた民謡だった。民謡とは、「人間性の自然がつねに生き生きと、むき出しに表現されている」もので、「文学にとっての母なる自然である民族の若い詩精神が、時代の歴史的條件に規定されさまざまな現象形態をとりながらも、つねに脈々と健康に呼吸している」という。当時の宮廷の貴族たちの間では漢詩が力をもっており、それは「彼らが日本人としての民族性をうしない、植民地化・コスモポリタン化されてゆく過程」だった。にもかかわらず『万葉集』では民謡と結びつくことで、「民族的な抵抗」がおこなわれたという。

物語文学は、大化改新以来の律令制の矛盾が深まり、「地方農村における人民の堪えざるたたかい」によって古代国家が危機に見舞われた時代に確立された。貴族らの間では、貴族社会への懐疑や反省から、現実を離れた孤独性、内向性、感傷性からなる「浪漫精神」の世界観が形成された。それは「政治的・公共的精神の喪失」を代償として芽生えた主観性であり、散文による分析的・反省的な表現を生み出すことになる。そしてその枠の中でもまた、優れた作品を生み出す原動力となったのは「民族の伝統」だった。「外来文化」に浸透された男子官僚たちではなく、「漢字文化に毒されぬ民族の伝統」を保持する女性の仮名の文学である『源氏物語』『宇津保物語』によって、その達成がなされた。しかし、貴族による古代文学の「解体・没落」の趨勢は止めようがなく、以後は民衆の力を背景として勃興する新しい中世文学との戦いが展開される。『今昔物語』は、「民衆生活に根ざすこの生き生きとした口誦活動を積極的にとらえた」ために、文学として画期的な存在となった。武士を筆頭とした「素朴な地方勤労人民」の力によって、やがて『平家物語』という「偉大な民族的叙事詩」が創造されるに至ると、西郷は結論づけていた²⁴。

もちろん、現代の視点からみれば、ヘーゲルをはじめとした西欧の美学にもとづいた、叙事詩・抒情詩・物語のジャンル交代の図式をそのまま日本文学にあてはめるのは、牽強付会としかいいようのないものである。だが、当時の西郷信綱にとって、この『日本古代文学史』は、戦時

24 西郷信綱『日本古代文学史』岩波書店、一九五一年。

中から彼が国学論を通して主張していた研究法の実践としての側面を持っていた。国学＝国文学の文献学的研究の、「経験的・肉体的労働」としての実証主義の限界を超える、戦後的なナショナリズムと社会主義革命の思想をこめた歴史観を提示しようと、彼は試みたのである。

西郷はそれを、文学独自の相対的に自立した法則性だと述べるが、それでもなお、古代の政治・経済史との密接な関連性を重視している。特に、古代における天皇制国家と外来の漢字・漢文文化の浸透の問題は、西郷の文学史のなかで大きな役割を担わされている。それらは、日本の民族的・民衆的な感性の対極に位置づけられており、前者と後者の対立・葛藤によって文学ジャンルの展開が促進されることになる。そしてそこで常に西郷は後者に価値を与える。民族・民衆の中に、来るべきプロレタリア革命の原動力と同根のものを見出したのである。

前近代における「文学遺産」のなかに、革命を促す力を見出そうとするこうした文学史観は、戦後まもなくの時期における西郷自身の、国学の前近代性の払拭と国文学の近代性の主張からは、論点の中心がいくぶん移動している。しかし先にも見たように、前近代からの国文学の「遺産」引き継ぎの議論自体は、戦後まもなくの時期の国文学界においてすでに提出されていた考え方でもあった。民衆を主体とした民族伝統の重視は、個人の主体を基点とした国民の形成という戦後直後の西郷自身の主張と決して矛盾するものではなかった。むしろ民族や民衆との連帯を通してこそ、上からの権威や権力に屈しない、真の意味で社会的な個人の主体性が獲得されるというのが、彼の考えだったのである。民俗学や歴史学など隣接領域を強く意識した研究手法には、国文学の閉鎖的なムラ社会に対する批判もこめられていただろう。

そして、このように国文学における民族伝統の遺産を重視するさい、西郷が、社会主義革命を達成した中国やロシアの作家を参照していた点は重要である。彼の考えでは、魯迅やプーシキンのような中国やロシアの作家は、独自の民族形式によって創作したがゆえに、「真に世界的な作品」生みだし得たという。つまりここでは、民族主義を貫徹することがそのまま世界的な文学の条件として示されている。そしてここで彼が考える文学の世界性とは、いうまでもなく社会主義・プロレタリア革命につながるべきものとしての普遍性だった。西郷にとって国文学の伝統の遺産を受け継ぐべきという主張は、日本民衆との連帯というナショナリズムの表現であるが、それは孤立した排外主義への方向へ向かうものではなく、中国やロシアらの諸民族の文学によって構成される社会主義圏の文学の世界秩序の中に、日本民族の文学を参入させようとする願いを込めたものでもあったのである。そしてまた一方で、『日本古代文学史』で西郷が、

天皇制による専制的な国家主義とともに、漢字文化に代表される「外来文化」による、日本文化の「植民地化・コスモポリタン化」を強い調子で批判していた点に注意したい。ここでは、戦前・戦中の天皇制国家体制への反対とともに、「アメリカ帝国主義」への対抗が表現されていたといえるだろう。古代日本における漢字文化の流入が、サンフランシスコ講和条約での単独講和と日本の対米隷属の固定化という当時の国際情勢が重ね合わされていたのである。

すなわち、一九五〇年代の西郷信綱の国文学論は、東西冷戦下における資本主義陣営と社会主義陣営という二つの大きな世界秩序が激しく対立する情勢の中で、社会主義陣営の世界秩序の下で国民国家としての日本の文化的立場を新しく確立させようとするものだった。日本民族・日本民衆の文学伝統に着目することを通して、西郷は、アメリカ合州国に代表される資本主義陣営の世界性ではなく、社会主義国家群の世界秩序の枠組の中で、日本文学の世界性を確立・証明しようとしたのである。

6 世界文学と喪われた大東亜共栄圏

以上、第二次世界大戦後の日本の「国文学」がどのような状況にあったかについて検討した。戦時中の日本では、ほぼすべてと言ってもよい国文学者が、戦争遂行を賛美しそれに荷担する言説と活動を展開していた。だが、戦後になると、学界における戦争賛美の中心的役割を担っていた藤村作や久松潜一、岡崎義恵ら「大家」たちの多くは、様々な論理を用いて戦争責任を逃れ、新たな社会状況の中で延命を計った。日本文学の伝統は本来、平和と民主主義を旨とするものであり、戦時中の戦争肯定の言説は、一部の軍国主義者による強制によるものであると述べたのである。戦争肯定と超国家主義の論理が平和主義と民主主義、文化国家建設などの論理へと差し替えられる一方で、天皇制や風土性の論理は、国文学・日本文化の民族的な連続性を担保とするものとしてそのまま引き継がれ、国文学界の大部分は体質や担い手、論理を受け継ぐことになったのである。

国文学の民族的な枠組の前提を残しつつ、思想の方向性を逆転させて戦後的な状況に対応する手法は、戦争責任の比較的軽微であり、戦後に従来の国文学界への批判に回った若手の左派系の国文学者においても、ある意味同様に採用されたものだった。戦後の歴史社会

学派を代表する西郷信綱をはじめ、多くの左派系の国文学者は、戦時期の軍国主義への反省から、戦後に近代的な個人や主体性を重視する国文学論を展開したが、それはあくまでも国文学の民族的枠組を前提とするものだった。むしろ、連合軍による占領と東西冷戦の激化という国際状況を背景として、「アメリカ帝国主義」に反対する民族主義の立場をとったのである。

そして、国文学の民族的な枠組の自己同一性を保つために、戦後の文学研究のアカデミズムでさかんに唱えられたのは、日本文学の「世界性」「普遍性」「国際性」の問題だった。戦時期の大東亜共栄圏の言説は、たんなる夜郎自大の国粹主義として切り捨てられ、それに変わるものとして世界各国の文学状況を見据えた比較文学的な研究手法が目指されたのである。戦後における比較文学研究の本格的な組織化は、そうした文脈の下で開始されたものだった。そして日本文学の世界性・国際性をめぐる当時の議論は、アメリカによる占領を前提とした国際協調主義を目指すものと、ソビエトや中国ら社会主義諸国を意識したものの、異なる二つの方向からのものがあった。当時の日本の左派系知識人の間で大きな思想的影響力をもった日本共産党は、一九五〇年を境に、所感派と国際派に大きく分裂し、やがて民族主義の立場をとる所感派が主導権を握ることになった。サンフランシスコ講和会議を背景とした全面講和論や、国民文学論の活発化もあり、当時、民族主義的な立場からの国文学論が多く提出されていたが、しかしマルクス主義の本来持つ国際主義が忘れられたわけではなく、西郷信綱ら左派系の国文学者は、社会主義諸国の民族文学を意識した国文学の普遍的性格を考えようとした。社会主義の普遍性を前提としたうえで、国文学の民族的枠組を強化しようとしたのである。

だが、そうした東西冷戦下の「世界文学」をめぐる議論でしばしば忘れられがちとなったのは、かつて戦前・戦中の「大日本帝国」が、大東亜共栄圏という日本を中心とした独自の世界秩序を構築しようとした過去であり、当時の日本文学・国文学もまた、たとえそれがたんに時局に迎合するための空虚なスローガンにすぎなかったとしても、朝鮮や台湾など多くの海外諸地域を含めたものに拡大・普遍化されてゆくべきとする主張を、一度はとなえていたことの意味である。

たとえば比較文学者の島田謹二は、昭和戦前・戦中期の植民地台湾で活発な執筆活動を展開し、台湾で書かれる日本語作品を国文学の新たな一部門として考える植民地文学論を数多く論文として発表していた。だが、第二次世界大戦後、東京大学教養学部で新設された比較文学比較文化課程を拠点に、日本の比較文学界をリードするようになってからは、彼は台湾

について大きな問題として論じなくなっていく。かわりに、明治以降の日本近代文学と欧米文学の交流や、島田の代表作として広く読まれた『ロシアにおける広瀬武夫』(弘文堂、一九六一年)、『アメリカにおける秋山真之』(朝日新聞社、一九六九年)に見られるような、欧米列強の脅威の中での明治期日本軍人の研究に専念していくことになる。

戦後日本の国文学と比較文学は、多くの場合、このようにかつての植民地や占領地への加害責任をなせば忘却したうえで、欧米や中国の文学と日本の文学の国別の比較をおこなう研究を積み重ねることになったといえる。台湾や朝鮮など旧植民地を喪った後の「日本国」の領域を本質主義的な自明の前提として、日本文学のナショナルな枠組の自画像を描くようになったのである。それは、アメリカによる占領統治を唯々諾々として受け容れた国文学者であれ、それに反撥して社会主義圏の国際性の中で国文学を考えようとした国文学者であれ、共通した態度だったといえる。そして、日本統治時代の台湾や朝鮮における日本語文学の問題が考察の対象とされるには、一九六〇年代中頃まで時間を要することになった。

そして、西郷信綱による一九五〇年代の国文学論は、あまりに政治的なイデオロギー性を拘り定規にあてはめた議論というほかないものであり、戦前の軍国主義賛美の国文学論と同程度に、現在においてとうてい受け入れることのできないものであることも確かである。政治的イデオロギーの突出については、西郷自身ものに「まずい」と考えたようで、一九六一年に『日本古代文学史』を新規に書き直した「改稿版」を刊行し、「旧著は放棄」することになる。「改稿版」では、叙事詩・抒情詩・物語という文学ジャンル論は維持しつつも、「プロレタリアートの英雄」「素朴な勤労人民」などの社会主義革命を直接訴える語彙や、「偉大な民族精神」「外来文化による植民地化への抵抗」といった民族主義を露骨に訴える記述があらかた削除されている。古代日本における大陸文化の影響について肯定的な記述も目立ち、全体的に一九五〇年代におけるような露骨な政治的主張が影を潜めているのである。西郷は、一九六〇年に刊行した『詩の発生 文学における原始・古代の意味』(未来社)のなかで、折口民俗学の視点を取り入れつつ、古代文学における「詩の発生」の問題を考察しており、社会主義革命や民族主義、反米をめぐる露骨な政治的主張は、すでに彼にとって関心の中心ではなくなっていたと考えられる。

敗戦後まもない頃の国文学界で発言力をもった、西郷ら「歴史社会学派」の学説は、今日から見て学問的に明らかな杜撰さを抱えており、今日の学問水準においてそれをそのまま適用

することはとうていできない。高度経済成長期になると、国文学界で「歴史社会学派」はそれまでのような発言力をもつことはなくなっていく。戦後体制が安定するにつれ、国文学という学問の中核的な地位を戦前から占めてきた文献学研究的の体制は、再びその位置を堅固なものとしていったのである。

だがそれは、一九六〇年代以降の国文学が、イデオロギー性を弱めたということの意味するものでは決してないだろう。政治環境と社会体制がいちおう安定した高度経済成長期以降には、「国文学」というシステムがその土台の部分で前提する国民国家の政治性や東西冷戦の国際的枠組みのイデオロギー性に、国文学者たちが直面せずに済むようになったというだけの話であると考えられる。一九四〇～五〇年代の国文学は、たしかに旧植民地の問題についてまったくいいほど無頓着であり、「日本民族」概念の歴史性を反省的に考察することがなかった。だが、少なくとも彼らが提出した反軍国主義や反封建主義、反徒弟制などの政治言説は、戦争そして敗戦という巨大な衝撃をうけて、その存在そのものが本来もっていた政治性に、いい意味でも悪い意味でも直面せざるをえなかったことに起因する。マルクス主義や反米民族主義の露出は、戦争責任や東西冷戦のむき出しの政治性の中で、国文学という学問がどのように自己を再構成していくかをせまられた結果だったのである。

しかし、むき出しの政治性が表面的に顔を出さなくなった一方で、帝国大学を頂点とした国文学研究のアカデミズムは、戦後の戦争責任論を「なかったこと」のようにして素通りし、「地道」で「厳密」、「洗練された」学問と徒弟制度を維持・再生産していくことになる。戦前から続く制度や体質、そして人的構成を以後もほとんどそのまま残存させたまま、戦後直後の政治的議論を風化させていったのである。

(Sasanuma Toshiaki 東海大学日本語文学系)